

ヨハネの福音書 7章の「飲むというしるし」

ベレーシート

●ヨハネの福音書の中心テーマは「いのち」と「建て上げ」です。6章のしるしは「**食べる**」ことでした。それは天からのパンであるイエシュアを食べて、いのちを得ることです。しかし7章のしるしは「**飲む**」ことです。しかし7章ではその奇跡はなく、約束として「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい」と語られているだけです。何を飲むのかと言えば「**イエシュアの霊**」であり、「イエシュアの中へと信じる者が受けることになる霊」です。6章と7章はワンセットであり、飢えと渇きに対して、天からのパンと生ける水の川によって「イエシュアを食べ飲みする」ことの重要性が語られています。

●7章では、やがて「人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」ことを正しく教えるために、①「わたしの時はまだ来ていません」(1～13節)、②「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものです」(14～24節)、③「わたしがいるところに来ることはできません」(25～36節)というイエシュアの三つのことばをもって支える形となっています。しかも、さまざまな人々との会話の中でそれらが語られています。ヨハネの福音書7章にあるイエシュアの数々のことばは、イエシュアの弟子たちに語ったものではなく、以下に挙げるような人々に語られたものです。

- ① ユダヤ人たち(宗教指導者たち) ② イエシュアの兄弟たち ③ 群衆
- ④ エルサレムのある人たち ⑤ パリサイ人たち ⑥ 祭司長たちとパリサイ人たち
- ⑦ 下役たち(祭司長たちとパリサイ人たちがイエシュアを捕らえようとして雇われた者たち)
- ⑧ 議員たち ⑨ ニコデモ

●イエシュアへの罪定め(さばき)を巡って、宗教指導者であるユダヤ人たちと群衆の間に、また群衆の中に分裂が起こっています。議員たちの中でも意見の相違が生じています。また誤解も見受けられます。今回は 37～38節のイエシュアのことばから始めたいと思います。そこには、私たちが飲むべき「生ける水の川」のしるしについて語られています。

1. だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい

●人が木や川を「食べ飲み」することは、人が造られた創世記2章ですでに記されています。

【新改訳 2017】創世記2章9～10節

9 神である主は、その土地に、見るからに好ましく、**食べるのに良い**すべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。

10 **一つの川**がエデンから湧き出て、園を潤していた。・・・

ヨハネの福音書の「エキス」

●神である主が9節では人が食べるべき木を生えさせ、10節では人が飲むべき川を湧き出させていました。人はエデンの園で神のことばである木を食べ、霊であるいのちの水の川を飲むことで、神である主と交わるように定められていました。ヨハネの黙示録22章に、そのヴィジョンの啓示をヨハネは見ています。

【新改訳2017】ヨハネの黙示録22章1～2節

1 御使いはまた、水晶のように輝く、**いのちの水の川**を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、
2 都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせる**いのちの木**が
あって、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした(=「健やかにしていた」の意)。

●また旧約には、神である主に選ばれたイスラエルの民が荒野に導かれたとき、彼らは天からのパンである「マナ」と「岩から出る水」によって、**飢えと渇き**を満たされたことが記されています。

①【新改訳2017】出エジプト記16章4節

主はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたがたのために**天からパン**を降らせる。民は外に出て行って、毎日、その日の分を集めなければならない。これは、彼らがわたしのおしえに従って歩むかどうかを試みるためである。

●「天からのパン」が「マナ」で、イエシュアの口から出る一つ一つのことばを啓示しています。イエシュアはサタンに対して、「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる』と書いてある。」(マタイ4:4)と語っています。

②【新改訳2017】出エジプト記17章6節

さあ、わたしはそこ、ホレブの岩の上で、あなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。岩から水が出て、民はそれを飲む。」モーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのとおりに行った。

●「岩」とは「キリスト」であるとパウロは解釈しています(1コリント10:4)。その岩を打つとは、キリストが「死ぬ」ことを意味します。死んで復活することで、イエシュアが神の民の霊の食べ物と飲み物となるのです。出エジプト記16章と17章はそのことを啓示していました。バビロン捕囚から解放されたイスラエルの民に対して、ネヘミヤは荒野時代の神の恵みを回顧していますが、その中にもそのことが語られています。

①【新改訳2017】ネヘミヤ記9章15節

彼らが飢えたときには、天からパンを与え(出16章)、渇いたときには、岩から水を出し(出17章)、・・・

②【新改訳2017】ネヘミヤ記9章20節

あなたは、彼らを賢くしようと、ご自分の良き霊を与え、
彼らの口からあなたのマナを絶やさず、彼らが渇いたときには水を与えられました。

●②で顕著な点が見られます。それは「**あなたは、彼らを賢くしようと、ご自分の良き霊を与え(られた)**」

ヨハネの福音書の「エクス」

と記されていることです。原文は以下の通りです。

レハスキーラーム	ナータッター	ハットーヴァー	ルーハー
לְהַשְׂכִּילָם	נָתַתָּה	הַטּוֹבָה	רוּחְךָ
彼らを賢くするために	あなたは与えた	良い	あなたの霊を
לְהַשְׂכִּילָם			

●神が神の民を「賢くしようと、ご自分の良き霊を与える」ことが不可欠であることが語られています。旧約最後の預言書のマラキ書でも、「神は人を一体に造られたのではないか。そこには、霊の残りがあ。その一体の人は何を求めるのか。神の子孫ではないか。あなたがたは、**自分の霊に注意せよ**。あなたの若いときの妻を裏切ってはならない。」(2:15)とあります。ここにも「霊」の重要性が語られています。それから 400 年後のイエシュアのことばにつながっているのです。

●また、ネヘミヤが語った時というのが城壁を完成した月の翌月、主の例祭のひとつである七日間の「仮庵の祭り」と「きよめの集会」(八日目)を行った後で、イスラエルの民は自分たちと先祖の罪を告白して、神を礼拝し、主を賛美しました。その賛美の中で 5～37 節の長い祈りがささげられるのですが、その中に「あなたは、彼らを賢くしようと、**ご自分の良き霊を与え(られた)**」があるのです。このことは、預言的・オ義的・重層的で。重層的であるとは、事実、荒野の時代にも、「主は彼らを賢くしようと、ご自分の良き霊を与えて、彼らの口からご自身のマナを絶やさず、彼らが渴いたときには水を与えられた」という霊的恵みを含んでいたことが、仮庵の祭りの時に回顧されています。これは、のちにイエシュアが同じ祭りの「大いなる日」に語られたこととつながります。「つながる」というのは、神のご計画において、歴史的必然があるということです。マラキ書でも「**自分の霊に注意せよ**」と警告されていますが、旧約の霊は永久的なものではなく、限定的なものでしかありませんでした。そこでイエシュアにつながってくるのです。

●イエシュアも同じく「仮庵の祭り」の最終日の「大いなる日」に語ったのが、ヨハネ 7 章 37～38 節のことばです。「大いなる日」は最も聖なる日です。祭りのクライマックスです。その時に、イエシュアがすでに「立ち上がっておられ」て(大完了形)、「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい」と言ったということは、祭りによっては人の渴きは満たされないことを予め知っておられて、語られたことばだということです。このことは、キリスト教の集会を行うことによって渴きが満たされることはないということと同じです。むしろかえって「渴く」のです。そこでイエシュアは言われます。

37 「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」

38 わたしを信じる者(わたしの中へと信じる者)は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」

39 イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊(冠詞なし)について、こう言われたのである。イエスははまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。

●4 章でも、すでにイエシュアはサマリアの女に対して同じことを語っています。

【新改訳2017】ヨハネの福音書4章13～14節

ヨハネの福音書の「エクス」

13 イエスは答えられた。「この水を飲む人はみな、また**渇きまず**(ディプサオー：διψάωの未来形)。

14 しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して**渇く**ことはありません。

わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が**湧き出ます**(未来形)。」

(原文=永遠のいのちへの水が湧き出ること(ハッロマイ：ἄλλομαι分詞)になります(ギノマイ：γίνομαι未来形)

●「わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して**渇くことはありません**」も、また、「わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます」も、太字の部分はいずれも未来形です。やがて時が来たら「決して渇くことがない」ということ、そして「わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます」ということが、やがて現実となることを語っています。ただ、7章の場合は、それをもたらすことになる「霊」が「**まだなかった**」ことを鮮明にしています。イエシュアが「栄光を受ける」時とはいつのことなのでしょう。それを提起しているのが、7章2～13節なのです。

2. わたしの時はまだ来ていません

【新改訳 2017】ヨハネの福音書7章2～13節

2 時に、**仮庵の祭りというユダヤ人の祭りが近づいていた。**

3 そこで、イエスの兄弟たちがイエスに言った。「ここを去ってユダヤに行きなさい。

そうすれば、弟子たちもあなたがしている働きを見ることができます。

4 自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい(=公然と世に表しなさい)。」

5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。

6 そこで、イエスは彼らに言われた。

「**わたしの時はまだ来ていません**。しかし、あなたがたの時はいつでも用意ができています。

7 世はあなたがたを憎むことができないが、わたしのことは憎んでいます。わたしが世について、その行いが悪いことを証しているからです。

8 あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りに上って行きません。

わたしの時はまだ満ちていないのです。」

9 こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。

10 しかし、兄弟たちが祭りに上って行った後で、イエスご自身も、表立ってではなく、

いわば内密に上って行かれた。

11 ユダヤ人たちは祭りの場で、「あの人はどこにいるのか」と言って、イエスを捜していた。

12 群衆はイエスについて、小声でいろいろと話をしていた。ある人たちは「良い人だ」と言い、

別の人たちは「違う。群衆を惑わしている(プラナオー=πλανῶ=危険な人)のだ」と言っていた。

13 しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はだれもいなかった。

※「ユダヤ人たちを恐れた」とは、ユダヤの宗教指導者たちの政策に対して恐れていたことを意味します。

(1) わたしの時はまだ来ていません

① 【新改訳 2017】ヨハネの福音書2章4節

ヨハネの福音書の「エクス」

すると、イエスは母に言われた。

「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。**わたしの時はまだ来ていません。**」

② 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 7章 6 節

そこで、イエスは彼らに言われた。

「**わたしの時はまだ来ていません。**しかし、あなたがたの時はいつでも用意ができています。」

③ 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 7章 8 節

あなたがたは祭りによって行きなさい。わたしはこの祭りに上って行きません。

わたしの時はまだ満ちていないのです。」

④ 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 7章 30 節

そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。

イエスの時がまだ来ていなかったからである。

⑤ 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 8章 20 節

イエスは、宮で教えていたとき、献金箱の近くでこのことを話された。

しかし、だれもイエスを捕らえなかった。**イエスの時がまだ来ていなかったから**である。

(2) 時が来ました

① 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 12章 23 節

すると、イエスは彼らに答えられた。「**人の子が栄光を受ける時が来ました。**」

② 【新改訳 2017】ヨハネの福音書 17章 1 節

これらのことを話してから、イエスは目を天に向けて言われた。

「父よ、**時が来ました。**子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。」

(3) イエシュアの定められた「時」とは何か

●人の子であるイエシュアの「時」とは、「イエシュアが栄光を受ける時」です。それは、人の子イエシュアがエルサレムで苦しめられ、殺され、三日目に死からよみがえられる時です。その時、秘密の昇天をした後でイエシュアは「いのちを与える霊」となります。そして人のただ中に入ることが出来ます。事実、それは機能不全を起こした人の霊を再生して、その霊の中に内住されます。このことが起きる時は仮庵の祭りではなく、過越の祭りです。イエシュアが世において公に表される時とは、エルサレムにおいて**死と復活を通られる時**です。それはイエシュアが公に「世に憎まれる」時なのです。

●イエシュアの兄弟たちは、仮庵の祭りの時に公然と自分を世に明かしなさいと提言します。ところがイエシュアは「わたしはこの祭りに上って行きません」と言いました。なぜなら、「わたしの時はまだ来ていないから」です。「わたしの時」とは、仮庵の祭りではなく、過越の祭りの時と定まっているからです。イエシュアが栄光を受ける時とは、イエシュアがエルサレムで苦しみを受けられ、死んで、三日目によみがえれる時です。その時こそ「わたしの時」なのです。

ヨハネの福音書の「エクス」

●「イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである」(7:39)とあります。「下っていなかった」と訳すと、あたかも五旬節の聖霊降臨の時に「その霊は下った」と思わせまです。ですからここは、原文通り「**まだなかった**」がふさわしい訳と言えます。なぜなら、その霊は「いのちを与える霊」(Iコリ 15:45)のことだからです。イエシュアは復活されたその日の夕べに弟子たちの所に現れ「息を吹きかけて、『聖霊を受けなさい』と言われ、「いのちを与える霊」となって弟子たちの「霊」を回復し、内住されました。このことが神の奇しいわざなのです。ここから「新しい創造」が始まるのです。それはすでに包括的に(客観的に)始まっているのです。ここから、「キリストにあるニュークリチャー(New Creature)」として、「たましい」が造り換えられ始め、携挙の時には「たましい」も「からだ」も完全に換えられるのです。このことによって、エレミヤ書 31 章にある「新しい契約」が成就されます。ですから「霊」は極めて重要なのです。

【新改訳 2017】エレミヤ書 31 章 31～34 節

31 見よ、その時代が来る——主のことば——。

そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。

32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った——主のことば——。

33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——主のことば——。

わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。

わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

34 彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『主を知れ』と言って教えることはない。

彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——主のことば——。

わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。』

●これらはすべては神の霊によってなされるのです。それゆえ、「たましい」(心)ではなく、「霊」によって生きることが求められているのです。「たましい」は「からだ」とともに、「肉」の領域にあります。肉の思いは神に敵対するものです。ですから、肉にある者は神を喜ばせることはできないのです(ローマ 8:7～8)。私たちの霊は神の霊とともに働いて、神の子どもであることを証しするのです(ローマ 8:16)。

3. わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のもの

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 7 章 14～19 節

14 祭りもすでに半ばになったころ、イエスは宮に上って教え始められた。

15 ユダヤ人たちは驚いて言った。「この人は学んだこともないのに、どうして学問があるのか。」

16 そこで、イエスは彼らに答えられた。

「**わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のもの**です。

17 だれでも神のみこころを行おうとするなら、その人には、この教えが神から出たものなのか、

わたしが自分から語っているのかが分かります。

18 **自分から語る人は自分の栄誉を求めず。**

ヨハネの福音書の「エクス」

しかし、自分を遣わされた方の栄誉を求める人は真実で、その人には不正がありません。

19 モーセはあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」

●「祭りもすでに半ばになったころ」、つまり、ここでの祭りは「仮庵の祭り」で、八日間も行われている祭りです。イエシュアは弟子たちに隠れて秘かに、この祭りに上って行きました。その祭りの「半ば」つまり四日目になって、公然と姿を現して教え続けられたのです。その教えにユダヤ人たちは、「この人は学んだこともないのに、どうして学問があるのか」と驚いた(驚き続けた/未完了形)のです。

●当時、学問をする場合はユダヤ教のラビの下で研鑽を積んだようです。特にパリサイ派は年長者を敬い、年長者のラビに対立するようなことをせずに、先輩を非常に尊重して学問をしていたようです。同様に、イエシュアも自分自身の教えを教えているのではなく、「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものです」と言っています。原文は、「わたしの教えは、わたしのものではなく、**かえつて(ἀλλὰ)**、わたしを遣わされた方のもの」とあり、強い否定を表す「アツラ」(ἀλλὰ)で強調されています。共観福音書を見ると、イエシュアが「律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである」(マタイ 7:29)と表現していますが、これはイエシュア独自のユニークな見解を述べたのではなく、あくまでも、イエシュアを遣わされた方、すなわち御父の教えを語ったがゆえに権威があるのだ、という意味です。問題は、17～18節のことばの意味です。17節の「だれでも神のみこころを行おうとするなら、その人には、この教えが神から出たものなのか、わたしが自分から語っているのかが分かります」とは、どういう意味でしょうか。

【新改訳 2017】詩篇 40 篇 8 節

わが神よ 私は あなたのみにこころを行うことを喜びとします。

あなたのみおしえは 私の心のうちにあります。

●これは前節を伴い、ヘブル人への手紙 10 章 7 節にも引用されています。このみことばを百パーセント満たすことのできる方はイエシュアしかいません。神のみこころを行うことを喜びとするためには、心に神の律法が刻みつけられなければならないことなのです。ですから、「新しい契約」(エレミヤ書 31:33)では、「これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである—主のことば—。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」と約束されているのです。すでに、この「新しい契約」は包括的になされています。しかし、いまだ完成されてはいません。それが完成されるのは、エックレーシアにとっては携拳される時です。そのときに私たちのたましいとからだは変えられて、神のみこころを完全に行えるようになるのです。イスラエルの残りの者にとっての完成は、メシア王国の終わりです。ですからイエシュアは、宗教指導者であるユダヤ人たちに対して、まだ霊さえも与えられていないので、「**あなたがたはだれも律法を守っていません**」(19 節)と言ったのです。

4. わたしがいるところに来ることはできない

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 7章 31～36 節

- 31 群衆のうちにはイエスを信じる人が多くいて、
「キリストが来られるとき、この方がなされたよりも多くのしるしを行うだろうか」と言い合った。
- 32 パリサイ人たちは、群衆がイエスについて、このようなことを小声で話しているのを耳にした。
それで祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスを捕らえようとして**下役たち**を遣わした。
- 33 そこで、イエスは言われた。「もう少しの間、わたしはあなたがたとともにいて、それから、わたしを遣わされた方のもとに行きます。
- 34 あなたがたはわたしを捜しますが、見つけることはありません。
わたしがいるところに来ることはできません。」
- 35 すると、ユダヤ人たちは互いに言った。
「私たちには見つからないとは、あの人はどこへ行くつもりなのか。まさか、ギリシア人の中に離散している人々(ディアスポラ)のところに行って、ギリシア人を教えるつもりではあるまい。
- 36 『あなたがたはわたしを捜しますが、見つけることはありません。わたしがいるところに来ることはできません』とあの人が言ったこのことばは、どういう意味だろうか。」

●34 節のことばはどのような意味でしょうか。13 章 30 節では弟子たちに対して語っています。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 13 章 33 節

子どもたちよ、わたしはもう少しの間あなたがたとともにいます。あなたがたはわたしを捜すことになります。**ユダヤ人たちに言ったように、今あなたがたにも言います。わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません。**

●「子どもたちよ」とは「弟子たち」のことです。シモン・ペテロがこのことばに反応します。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 13 章 36～38 節

- 36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ、どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。
「わたしが行くところに、あなたは今ついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」
- 37 ペテロはイエスに言った。「主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら、いのちも捨てます。」
- 38 イエスは答えられた。「わたしのためにいのちも捨てるのですか。まことに、まことに、あなたに言います。
鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

●イエシュアが言っている「わたしがいるところに来ることはできません」(7:34)、「わたしが行くところに、あなたは今ついて来ることができません」(13:36)とは、イエシュアの**十字架の死**です。イエシュアは死を通して、復活します。「**後にはついて来ます**」(同)と言われのは、ペテロが後に主の証人として殉教し、やがてよみがえることが定まっているからです。「死と復活」はユダヤ人にとっても、弟子たちにとっても隠された神の奥義です。この出来事を通して、神はイエシュアを王とする御国を打ち立てようとしているのです。

三一の神の霊が、私たちの霊とともにあります。

2024.7.07